
殺人記～鬼と過ごした1週間～

佐井村伊佐太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人記〜鬼と過ごした1週間〜

【Nコード】

N53410

【作者名】

佐井村伊佐太郎

【あらすじ】

「殺して欲しい相手がいるの」琴棕が頼むのは「元」殺人鬼。人を殺せなくなった殺人鬼と少女との、少し変わった1週間。

——もう人は殺さない……

鬼と過ごす1日目その1（前書き）

「元」殺人鬼と少女との1週間の物語。
お楽しみいただければ幸いです。

鬼と過ごす1日目その1

この物語は人を殺せなくなった鬼の物語。
出来損ないの殺人鬼の物語。

（1日目）

黒いコートを着た男は歩く。人ごみを、何かから逃げるようにして。

「待って下さい！」

そんな男のコートの裾を捕まえた少女が叫ぶ。
すがりつく少女の手に、男の足が止まる。

「しつこいぞ！」

負けじと声を張り上げ、男は振り返る。

背も高く、コートなんか着ているから分からないが男はかなり若い。若く見える。

端正な顔、しかし眼光は異様に鋭い。

目を細め少女を見下ろす男。見下ろされる少女も負けじとにらみ返す。

人通りの多いこの場所で2人はかなり目立っていた。が、特に気にする風もない。

少女はそんな視線に構っていないし、男には・・・気にするだけの精神も持ち合わせてはいなかった。

「何度も言ったはずだ。俺はもう昔の俺じゃない」

「そこをなんとか。私にはあなたしか頼める人はいないんです！」
頼める、か・・・男はずっと視線を少女からはずした。

少女は手を離さない。

視線を少女に戻した男。少女の視線はただただ真っ直ぐで、男を突き刺すように真っ直ぐだった。

こんな視線は、ずるい・・・

「・・・ここじゃ話もろくに出来やしない。場所を移そう」

むすっとした顔で男はそう言い、身を翻し足早にこの場を去る。その後を慌てて少女は追う。

少女の目は、輝いていた。

男の初めての妥協だったから。

所変わって喫茶店。

大通りからは離れた小さな店だ。静かなクラシックが流れていた。

「で、話ってのは？」

注文を済ませるなり男が切り出した。

「前にお話したとおり。どうか引き受けて下さいませんか？」

「いやだね」

・・・即答だった。

さっきの会話から、少しは望みがあると思っていた少女。

しかし、そう簡単にはいかない。

だが少女は諦めない。諦めるわけにはいかない。

「あなたしか頼める人は・・・いないんです」

消え入りそうな声。

伏せた顔からは表情を読むことは出来ない。しかしスカートで包まれている少女の膝頭を濡らすものの正体くらい、男にも分かった。

「頼める人がいない・・・ねえ」

しかしなおも男は態度を変えない。変えられない。

少女が諦められないように、男も少女の願いを聞き入れる訳にはいかないのだ。

「そりゃそうだろうな。おいそれとは人に頼めない。普通の奴には尚更だ」

「だからあなたしか・・・」

「それでもだ！」

少女の言葉をさえぎり男は言う。

「俺は引き受けない。今の俺は・・・引き受けない」
ばつの悪そうに男は顔を背ける。

「なんで！どうしてっ！」

瞳に涙をたたえながら少女は身を乗り出す。

今更・・・今更一人くらい。少女は失礼だと分かりつつも、言わないわけには・・・言葉を止めることは出来なかった・・・

「今更一人くらい・・・殺すのなんて簡単なはずでしょ！」

男はその言葉に対して何も言わない。

ただ、固く目を閉じただけ・・・

男は「元」殺人鬼だった。

連続殺人。とにかく殺した。殺した・・・殺した、ころした・・・

しかし、ある時ぷつりと殺人は終わり、あっけなく事件の波にのまれ過去の事件となった・・・

所詮、そんなものだ。

殺人が止まった理由を、警察に極秘に逮捕されたからだと言う者もいた。

しかし彼女はそこまでしか知らない。事の真偽も分かっていない。
だが、彼女には十分だった。男が、殺人鬼だったという事だけで・・・

その他に興味はなかった。

だから彼女は、男の名前も知らない・・・

つい先程、店員が置いていったコーヒーから湯気が立ち上る。彼

女の前には紅茶が置かれている。

「あんた名前は？」

男は不意に問いかける。

「・・・琴棕こしりょう」

彼女、琴棕はぼそつと答える。

「そうか・・・」

「あなたは？」

コーヒーに口をつけていた男はそのまま動きを止めた。そしてそのまま不思議そうな顔で琴を見る。

なんでそんなことを聞く？目がそういつていた。

「私は名乗ったは、あなたも名乗るのが礼儀じゃない？」

言ったあと棕は少し失礼だったかな、と表情を曇らせた。ここで機嫌を損ねたらまずいからだ。

しかし男は気にした風もなく、涼しげな表情でコーヒーを飲んでいた。

「・・・あなたに俺の名前は必要か？」

「えっ」

「もう少し詳しく話してくれ、前の話は要領を得なかったからな。何をどうして欲しいかさえ言っていない」

棕は驚いた様に問いかける。

「殺してくれるの？」

すると男は心底うんざりしたような顔をして言った。

「頼むから、こんな所で殺すだのなんだの物騒なことを言わないでくれ。女の子だろ？」

そういう問題なのかなと棕は思ったし、ちょっと恥ずかしい台詞だなと思った。

「とりあえず・・・ついてきな」

そういうと男は伝票を持って立ち上がった。

どうやらここは男のおごりらしい。

鬼と過ごす1日目その1（後書き）

ここまで読んで下さった方。ありがとうございます！
次回も出たら、お暇なときにでも。
よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5341o/>

殺人記～鬼と過ごした1週間～

2010年10月27日02時50分発行